とせり、此の中可汗が杷頭烽[二〇六]を越え、大同川を略したるを八月とせるは、舊唐書本紀[二〇七]を以て正しと見たるが爲にして、其の他の諸書の記載する所の據る可らざるは、詳かに通鑑の註記に見え、今更めて論證するの要無し、而して先に引きたる舊唐書廻紇傳に會昌二年「秋頻劫東陝已北、天德振武雲朔、比羅俘戮」と記せるは、卽ち此の時の有様を記したるものに外ならず、可汗の侵寇此の如くなりしを以て、武宗は詔して策を百寮に問ひ、遂に李德裕の議により、進みて回鶻を討つの計を定むるに至りしが、此の時に於ける德裕の議の、舊唐書本紀に載せらるゝものを見るに、其の中に

廻紇所恃者嗢沒〔斯〕赤心耳、今既離叛、其强弱之勢可見、戎人獷猛、不顧成敗、以失二將、乘忿入侵、出師急擊、破之必矣、守險示弱、虜無由退、擊之爲便、天子以爲然

と記せり、果して李德裕の考へたるが如しとすれば、當時可汗の侵入は、實に自暴自棄の行動を以て、其の頽勢に處せんとしたるものに外ならず、而して肅代以來殆んど九十年、唐は茲に至りて初めて回鶻に對して攻勢に出づるを得るに至りたるものにして、其の對回鶻策上に一大變轉期を劃したるものなりとす。[二〇八]

斯て唐は翌春を以て回鶻を討つの策を定め、諸道の兵を徵して太原の地方に屯せしめ、九月張仲武・劉沔を以て回鶻東面及び南面招撫使に任じ、又李思忠卽ち回鶻の降將嗢沒斯を以て、回鶻西南面招討使に任じ、漸く進みて回鶻に逼りしが、翌會昌三年正月に至り劉沔の部下なる石雄は烏介可汗の營を襲ひて太和公主を獲、更に可汗を大に殺胡山に破り、之を潰走せしむるに至れり、舊唐書本紀には此の事を記して

〔三年二月〕太原劉沔奏、昨率諸道之師、至大同軍、遣石雄襲廻鶻牙帳、雄大敗廻鶻於殺胡山、烏介可汗被創[二一〇]